

「移動する子ども」の移動と意識の変容プロセス —少数散在という文脈にいたユリの事例をもとに—

佐々木ちひろ(名古屋大学大学院生)

1. 研究の目的

①フィリピン→「移動する子ども」(川上, 2011)がユリ(仮名)だけの学校(孤立環境)→「移動する子ども」が他にも複数いる学校(複数環境)、という移動してきたユリの意識の変容プロセスを明らかにする。

②それにより、「移動する子ども」に必要なことばの支援を再考する。

2. 研究協力者であるユリについて

- ・2014年9月にフィリピンから来日。
- ・小学校6年生(2018年12月現在)。
- ・父親は日本人。母親はフィリピン人。
- ・家庭内言語はタガログ語、英語もある程度理解し、話した。
- ・「移動する子ども」がいなかった学校(孤立環境)に転入し、2年生に在籍。
- ・来日時の日本語能力はゼロ初級。
- ・2018年1月、転居し、「移動する子ども」が複数いる学校(複数環境)に転校。

3. 研究方法

- ・ユリに半構造化インタビュー。
- ・ユリに孤立環境・複数環境で計2回のインタビュー。

データの分析の手順

- ①ユリの語りの中から「移動する子ども」である自らに対する意識が表れている対話を中心に抽出し、データとして提示。
- ②データを質的に分析。

データの分析の視点

- ①ユリの自らに対する意識は他者との関わりの中でどのように変容したか。
- ②ユリの自らのことばに対する意識は他者との関わりの中でどのように変容したか。

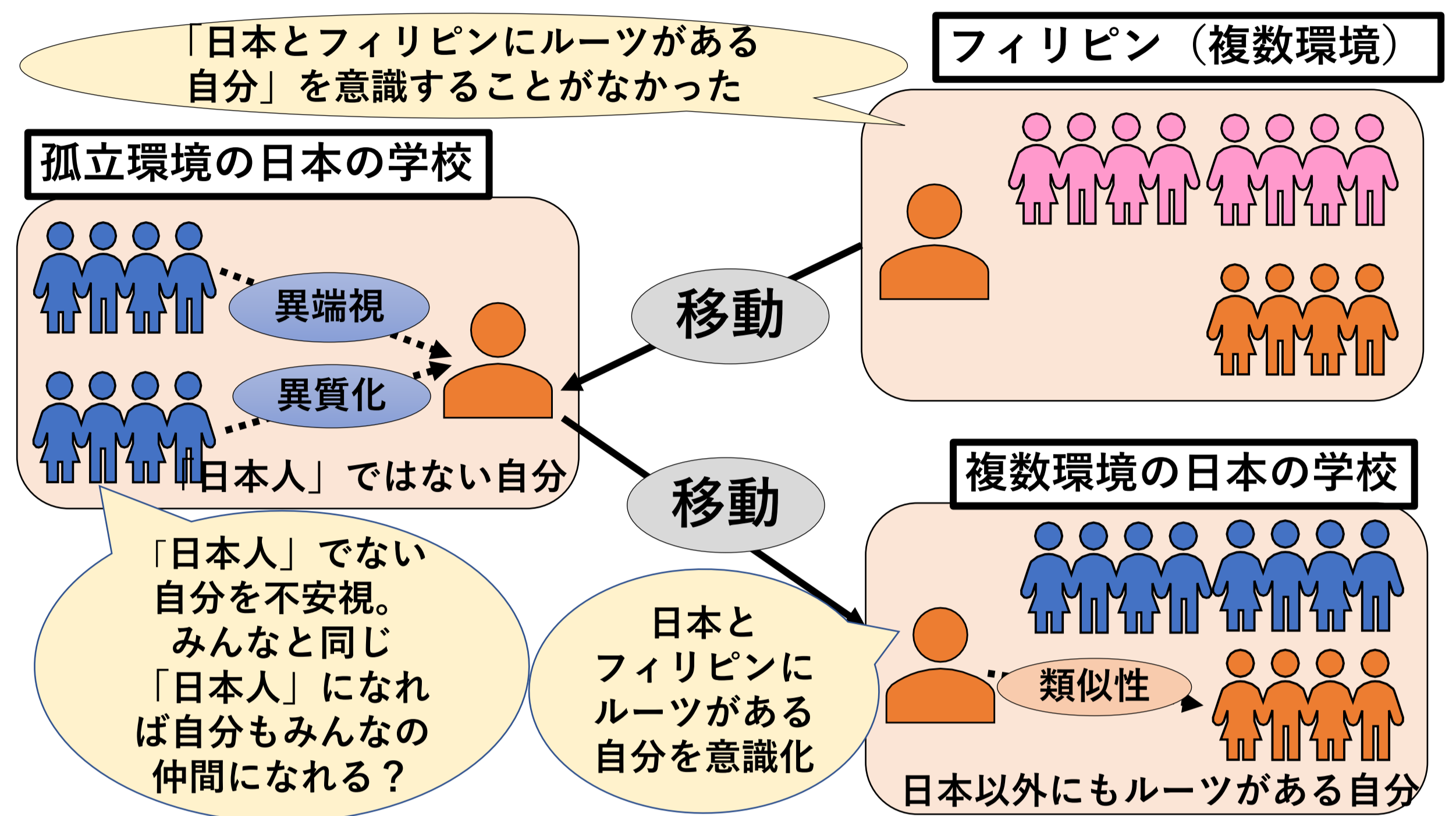
4. 分析結果

4. 1. 自らに対する意識の変化

①孤立環境: 自らのルーツを肯定的にまなざせなくなる。



②複数環境: 自らのルーツをまなざすようになる。

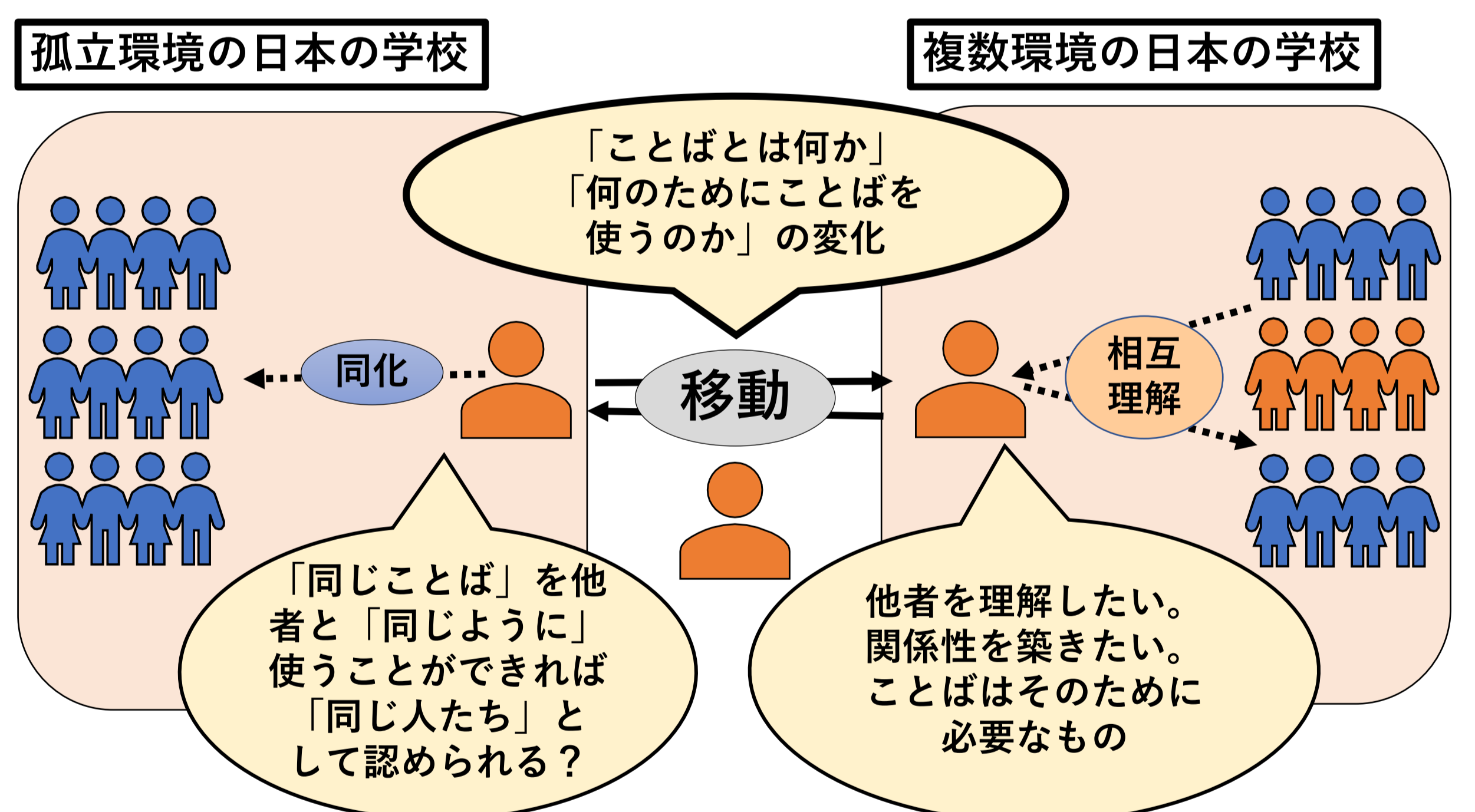


4. 2. 自らのことばに対する意識の変化

①孤立環境: その環境に適応するためのもの。



②複数環境: 意味ある相手と関係を構築するためのもの。



5. 考察

「移動する子ども」に必要なことばの力とは?

①移動により環境が変わる中で人間関係を構築するためのことばの力。

②移動により生じるアイデンティティの問題に向き合うためのことばの力。

・引用文献: 川上郁雄(2011). 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』. くろしお出版.